

ルーマン理論における排除個人性の問題

佐藤 勉

1. 問題の所在

現代社会は、21世紀を迎え、激動に次ぐ激動を重ねている。世界社会システムが形成される過程にあると同時に、様々な地域紛争が続発している。世界全体が、隅々まで関係するにおよんで、少数の地域の人々が安定した生活を送る一方では、大多数の地域の人々は餓死線上にあるといわざるをえない。ところが、そうした現代的状況を的確に分析する理論的武器を現代社会学が提示しているとは言い難い。そうだとすれば、現代社会の危機的状況を捉ええないところに現代社会学の危機があるといわざるをえない。それだけに現代社会のリアリティの核心に迫りうる理論的資源が、現代社会学に少しでも残されているとすれば、それが何であるかが問われることになる。ドイツの社会学者ニクラス・ルーマンは、現代社会を捉えうる理論の不在を1980年代に明確に指摘したうえで、自らその理論的空白を埋めることに全力をあげた¹⁾。もとよりルーマンが現代社会を十分に捉えうる理論の構築に成功したとにわかには断定できないだろう。なによりもまず、ルーマンの途方もない多数の著作に関する着実な点検なしに、ルーマン理論の評価を早計に下すわけにはいかない。そうだとすると、ルーマン理論のなかに、21世紀の世界社会の現実に一步迫りうる理論的資源がなほどこか胚胎していることは、歴然としているといってよい。このルーマンの遺産を適格に見極め、それを少しでも拡充することに現代社会学理論の展開のひとつの道筋があるといってよからう。

ルーマンは、1998年に70歳の生涯を終えるまで、途方もない数の著作を残した。数百編におよぶ論文や著作がわれわれの前にある。しかもルーマンは、通常社会学理論の枠をはるかにのりこえて、哲学や自然科学の理論的成果まで、自らの理論の栄養源としている。なかでも、フッサールの現象学とルーマン理論の親近性は明らかである。そればかりではない。ルーマンにとって自然科学の認識論はきわめて重要な理論的資源のひとつであった。というのも、ルーマンからすれば、社会学が科学システムの一部であるからには、科学システム全体の発展と社会学の展開の歩みは、歩調をともしなければならぬからである。ルーマン

(1)

のオートポイエーシスのシステム理論は、科学システム全体の発展をみすえたルーマンの理論的営為の帰結にほかならない。さらにルーマンは、現代科学の到達水準に社会学の水準を自らのオートポイエーシスの社会システム理論によって引き上げるだけでなく、ルーマンの社会システム理論が認識論の点で科学システムに対して貢献しようと自負していた。

そうしたルーマンにとっても、近代ないし現代における社会と人間の関係は、もっとも重要なテーマのひとつであった。ルーマンの社会システム理論が、近代ないし現代における社会と人間の関係の把握をその基底的な課題としていることは誰の目からみても明らかである。ルーマンにとって近代の人間と近代的社会の近代的関係の究明は、決定的に重要な問題のひとつであったといつてよい(佐藤 2003: 97-103)。このルーマン理論が、不思議なことに人間不在の理論だとしばしば論難されている。ルーマンにとって社会は人間の環境であり、人間は社会の環境にほかならない。このことが、人間を排除した社会理論ではないかという誤解を生み出した。これが甚しい曲解であることは、ルーマンの著作を着実に読めば自ら明らかになるだろう。ルーマンは、「近代の人間の現実に迫る」という提言をしばしば行うだけでなく、近代的人間の全容に迫りうる社会理論の構築に半ば成功したといつてよい。そういうルーマンが人間無視の社会理論を構築するはずはないのに、人間が社会の部分ではないとするルーマンの考え方が人間を社会から一掃したという批判にさらされていることは、不可解というほかはない。ルーマンは、1989年の「個人、個人性、個人主義」論文できわめて斬新な視角から近代の人間について魅力あふれる分析を行っている(Luhmann 1989)。この論文で、ルーマンは、近代の人間としての個人の概念を探求し、そうした近代的個人の論理としての個人の個人性を論じ、さらにはそうした個人の個人性のゼマンティックとしての要求個人主義(Anspruchsindividualität)を論じている。さらにルーマンの論文集『社会学的啓蒙』の最終巻である第6巻が「社会学と人間」という副題を有していることも忘れてはなるまい。しかも、この本の最後に掲載されている論文のタイトルも「社会学と人間」となっている(Luhmann 1995c)。この論文で、ルーマンは、近代の人間の問題を西洋中心的個人像や男性中心的個人像から解放された地平で論じなければならないことを積極的に主張している。

そうしてみると、ルーマンの近代の人間の把握が、中産階級的な視点や西洋中心的発想の枠内にとどまっているとするアルミン・ナセヒの厳しい批判(Nassehi 2002: 129, Nassehi 2003: 104-105)にはにわかには賛成しがたい。そうはいっても、ルーマン理論を神格化するいわれはまったくない。西洋中心的な個人像の限界内にあるとするナセヒの論難は、ルーマン理論に即してつぶさに点検されるべき重大な問題点の指摘のひとつであるというべきであろう²⁾。いずれにしても、ルーマンが、近代社会が近代的個人概念を産出し、さらにその近代的個人像に近代社会がいつそう適合するところに近代社会の発展の方向性を見定めていること(Luhmann 1989: 258)は、刮目に値するし、そうした理論的考察をふまえて、近代の人

間についての実践的で現実的に有効な提言としての価値を持ち続けるであろう。もっとも、そうだとするならば、ルーマンが、例えばグローバリゼーションをいっそう進展させている現代社会において農民や労働者のライフコースやバイオグラフィを積極的に論ずるための視点を十分に用意したかどうかは問われなければならない³⁾。残念ながら、ルーマンが、現代社会における様々な国や地域の、農民や労働者の生活の内実在即した生活史的分析を少しも行っていないという事実は否定できない。しかしながら、ルーマン理論がえぐりだした近代的人間と近代社会の近代的関係についての論考が、そうした労働者や農民の生活史を捉えるための理論的前提となりえる可能性はかなり高いとみることができるだろう。そんなわけで、むしろ生活史的分析に至る理論的資源がルーマン理論のなかにちりばめられているといえる。じっさい、ナセヒはルーマン理論の展開線上で魅力あるバイオグラフィ分析を行っている⁴⁾。

以上の観点から、本論文ではルーマンが「排除個人性 (Exklusionsindividualität)」という概念で近代ないし現代における個人と社会の関係の特性を描写していることに注目したい (Luhmann 1989 : 160)。排除個人性という言葉は、社会から個人が排除されるという印象を持たれかねないのは否めないであろう。成層化された社会においてある家族に誕生したということが、その人の社会との関わり方を全面的に方向付け、全体的に規定するという状態からは、排除されているということが、排除個人性の重要な意味であることをまずは確認しておく必要がある。ここでいわれている排除は、あくまでも社会と個人の関係の特性であって、決して社会から隔絶され、社会から追放された個人が前提とされた上で、そうした個人と社会の関係を指すために用いられているのではないことに、なによりもまず止目しておく必要がある。積極的にいえば、ルーマンにとって排除個人性の排除ということは、社会の一面的かつ全面的な規定に個人が従属するという状態が崩壊したうえで、個人が自らの創意と工夫で社会と関係する必要性が高まったという社会と個人の間を意味している。したがって、排除個人性は、そういう意味で個人が近代的個人ないし現代的個人であるための不可欠の社会構造的条件を明確に視野に入れた上での個人と社会の関係の特性であるといつてよい。この排除個人性が近代における社会と個人の近代的関係の特性描写であることをまずはしかと銘記するべきである。排除個人性の排除が意味するところは、社会への人間の丸ごとの包摂が崩壊したという状況で、社会の強力な圧力を免れて、個人が人間の存在の可能性の具体化に向けて社会に対して関わりをもち、ある意味では自由に、しかも「誰でも」という点では平等に参加できる可能性があるということに集約されるだろう。そうだとすると、排除個人性の最も重要な特徴は自由と平等を前提としての人的可能性の具体化に向けての社会参加であるといつてよかろう。

ルーマンにとって、排除と包摂は密接に関連している。というよりも、包摂と排除は、いわば同時に出現するということをルーマンは明言している。近代における個人と社会の関係

の形式として、包摂／排除をルーマンは想定している。「したがって、包摂は、ひとつの形式として把握されなければならない。その形式の内部側面（包摂）は、それぞれのパースンにとっての社会的な顧慮のチャンスとして指し示されており、その形式の外部側面は、そうしたチャンスとして指し示されていないままである」（Luhmann 1997：621）。さらにルーマンは、こうもいう。「排除が可能であるばあいにはのみ、包摂が可能である」（Luhmann 1997：621）。さらに続けてルーマンは次のように述べている。すなわち「社会秩序の形式としての包摂の諸条件が特定化される度合いに応じて、排除された事態という〔包摂と〕対立した事態がはじめて指定されうる。そうしてみると、そうした排除という〔包摂に〕対立している事態は、包摂に対して対極にある構造として、社会的秩序の形式や意味づけや根拠づけを行っている」（Luhmann 1997：621、〔 〕内は引用者）。さらにルーマンは包摂を次のように定義している。「正確にいえば、包摂というばあいに念頭におかれているのは、社会というシステムがそのパースンたちのことをあらかじめいろいろ考えて、そのパースンたちの地位の枠内において、パースンたちが期待相補的に行為できるパースンという位置をパースンに割り当てる、ということである。いささかロマン主義的にいえば、そうしたパースンたちは、個人として互いに慣れ親しんでいると感ずることができる」（Luhmann 1997：621）。以上のルーマンの叙述からうかがわれるとおり、包摂と排除は一对のことがらとして捉えられている。ちなみにルーマンが、包摂／排除を考えたのは、タルコット・パーソンズの統合概念に対する不満からであったということも、指摘しておく必要がある。ともあれ、排除の可能性がなければ、包摂はありえないし、包摂の前提として排除があるといわんよりは、包摂と排除は互いに他方を前提としているといつてよい。さらにいえば、包摂は特定できるとしても、排除のあり方は明確には特定できず、ある意味では、いまだ実現されざる新たな包摂の可能性の総体が排除ということもできるだろう。そういう意味で、包摂のコンティンジェンシーとして排除を位置づけることは十分に可能である。

いずれにしても、「包摂と排除 (Inklusion und Exklusion)」というときの「と」について深く考える必要がある。私は、この「と」の意味するところは、ひとつには包摂と排除の構成連関を示しており、もうひとつには包摂と排除の同時性を示していると考えたい。そうだとするならば、マレン・レーマンとともに、包摂と排除における空間メタファーをわれわれは徹底的に斥ける必要がある (Lehmann 2002：10)。そのさい注目されるべきは、包摂がある意味ではポジティブに定義可能なのに対して、排除は「いまだ包摂されざる事態」を意味しており、ネガティブに定義されざるをえないということである⁵⁾。したがって、仮に包摂される事態が指定されるとしても、排除されうることがらは本来的に指定されえないという未規定性ないし無規定性を有していることに注目したい。しかも、包摂についても、包摂される領域といったようなことはありえない。包摂される地域とか、箇所とかいった空間的メ

タフナーを、徹底的に排除する必要がある。

2. 排除個人性と近代的個人

排除個人性というルーマンの用語は、すでに述べたとおり、誤解を招きやすい奇妙な表現という側面を有しているといわざるをえない。みられたとおり、排除個人性は、決して社会から排除された個人を意味するのではなく、あくまでも社会と個人のある種の関係の特性描写だからである。しかも、この排除という概念によって「排除されていることがら」は、ある社会のある家族に生まれたことがその社会との関わり合いを全面的に規定しているという事態だけなのである。そうだとすれば、そのように社会からの一方的かつ全面的な規定が排除されたおかげで、個人はいわば個人の視点から社会への参加を企図することが可能になる。そんなわけで、排除個人性というのは、あくまでも社会との関係の形態であり、個人からすればはじめて本格的に個人の自由が可能になった機能分化を遂げた近代社会でみられる個人と社会の関係についての特性描写なのである。排除個人性という言葉が必要になったのは、あくまでも機能分化を遂げた近代社会においてであるということ忘れてはならない。言い換えれば、排除個人性という言葉で個人と社会の関係が表現される必要があるのは、成層化された社会が解体し、機能分化を遂げた社会が現出したからである。したがって、排除個人性は、機能分化を遂げた社会における社会と個人の関係の論理的表現といってもよからう。そうだとするならば、排除個人性はまさに近代的個人というものを考えるための社会的・文化的出発点を表現していると考えられる。繰り返していえば、排除個人性は、機能分化を遂げた社会とそうした社会を生き抜く個人との関係を視野に収めた概念といつてよい。

そうだとするならば、機能分化を遂げた社会のあり方について、まずは最小限の確認をしておく必要がある。機能分化を遂げた社会ではその機能ごとに様々な部分システムが分出している。例えば、経済システム、政治システム、法システム、科学システム、教育システム、宗教システム、芸術システムといった部分システムが分出している。それぞれの機能システムは、そのシステムなりに全体社会システムを描写している。つまり、社会は機能システムごとの様々なパースペクティブから観察される。ところが、多様な機能システムのそうした数々のパースペクティブは、全体としてひとつにまとめられるわけではない。そうした機能分化を遂げた近代社会においては、全体的社会システムといえるようなシステムはもはやありえない。そうしてみると、機能分化した社会においては、どれかひとつの機能システムが、他の機能システムの上位に位置することはもはやない。つまり、機能分化した社会は頂点もなければ底辺もなく、中心もなければ周辺もないという、脱中心的な社会となる。いってみれば、多数の機能システムが相互に依存してはいるものの、その相互依存の結果とし

てひとつの社会というシステムが単一的に形成されているのではない。そうした機能分化を遂げた社会が、個人とどのように関わることが問われよう。機能分化を遂げた社会において、それぞれの個人は複数の機能システムと関わり合っている。機能分化を遂げた社会においては、たったひとつの機能システムに参加するだけでは生きていけない。言い換えれば、そうした状況において、個人は生活するために多種多様な役割と関わらざるをえない。そうしてみると、多数の機能システムの多種多様な期待を処理することが個人に求められることになる。個人は、多種類の機能システムの多様な社会的諸期待に直面している。そういう諸期待は、自動的に互いに整合されたり、調整されたりしているのではない。そうした諸期待の整合や調整は、ある意味では個人に任せられている。言い換えれば、個人は多種多様な機能システムからの多種多様な社会的諸期待を自分自身でなんとか処理する必要がある。いってみれば、多数の機能システムの多様な社会的諸期待は、その諸期待それ自体としては、互いに整合化されていないだけに、その個人自身によってそうした諸期待が調整され、整合されなければならない。こうした多数の機能システムの多種多様な諸期待を個人が個人なりに処理する必要がある。ここに個人の個人化が明確に要請されることになり、個人の個人化が現出する。

そんなわけで、機能分化を遂げた社会においては、個人の社会への丸ごとの包摂はありえなくなり、様々な機能システムへのマルチ包摂だけが、包摂として考えられることになる。ルーマンが、排除個人性といったのは、このように機能分化を遂げた社会においては、社会のある部分システム、例えばある家族への出生がその人の人生行路をほとんど全面的に規定することがなくなって、個人のありようについての個人的決定のための社会的条件が整えられ、個人自身がさまざまな機能システムの多様な期待を自らで処理する事態が現出し、そのことをふまえて社会と個人の関係が成立していることを表現したかったからだといってよい。そうした排除個人性という社会と個人の関係を生き抜く個人のあり方が近代的個人ということになる。ルーマンが、排除個人性についてもっとも系統的に述べたのは、1989年の「個人、個人性、個人主義」という論文であった(Luhmann 1989)。この100頁をこえる長大な論文は、近代的個人と機能分化を遂げた近代社会の関係についてのきわめて詳細で、鋭い論考というだけではなく、近代的個人そのものについてのきわめて精細な分析を行っているといつてよい。この論文で、ルーマンは、成層化された社会における社会と個人の関係が、包摂個人性(Inklusionsindividualität)として特徴づけられるのにたいして、機能分化を遂げた近代社会においては、社会と個人の関係は排除個人性として特徴づけられると明言している。さらにその上でルーマンは、この排除個人性の帰結として要求個人性(Anspruchsindividualität)が登場していることに注目する。この要求個人性が、ゼマンティックとして明確な形をとると、要求個人主義が形成されることになる。

ところで、21世紀になってドイツにおいてかなりの数のルーマン研究が現出しつつある。アルミン・ナセヒの現代社会論、ダーク・ベッカーの組織論、ペーター・フックスのメタ理論、クラウド・P・ヤップのリスク論などが注目される。そうした刮目に値する最新のルーマン研究のなかで、排除個人性についての言及はかなりみられるのに、排除個人性と要求個人性の関係について明確に指摘した論考はほとんどない。このこともあって、本論文は、排除個人性の帰結としての要求個人性、ならびにそのゼマンティック化としての要求個人主義をきちんと視野に収めたうえで、ルーマンの排除個人性についての考え方を検討することをひとつの課題としている。私のみるところでは、要求個人性ないし要求個人主義は、現代における社会と個人の関係性、すなわち排除個人性をふまえて、そうした状況をどう生き抜くかに関する生活指針として作動しうるゼマンティックであることをルーマンは論証しようとしている。ルーマンが、明確に述べているとおり、個人の個人化が要請される排除個人性という状況においては、そうした個人の個人化が限りなく進展することが要請され、またそうした個人の個人化に見合ったかたちでの社会の複合性の高次化が要請されている。いってみれば、排除個人性を前提としての個人の個人化の進展を図るゼマンティックとして要求個人主義が現出している。そうした要求個人主義を育む、機能分化を遂げた社会は、他面では要求個人主義にいつそう適合するように社会を変化させることが求められている。いってみれば、排除個人性として特性描写された社会と個人の関係のなかで、あるべき社会と個人の関係を論理化したのが要求個人主義といえるのだが、そうした要求個人主義が機能分化した社会から生み出されると同時に当の機能分化をとげた社会が、さらにいつそう要求個人主義に適合するように社会を刷新することが要請される。その意味で要求個人主義は、現代における社会と個人の関係を描写するための知的道具にとどまらず、現代を生き抜く個人の方法的武器という性格を濃厚に有しているといえるだろう。

そうしてみると、要求個人性へと向かう排除個人性は、機能分化を遂げた近代社会が産み出した個人と社会の関係についてのロジックである。その意味でこの排除個人性は、近代社会における個人化現象と深く連関している。近代における個人化現象の進展をふまえて、社会と個人の関係を捉えるための概念が、排除個人性であったとみてよかろう。いずれにしても、排除個人性は、近代における個人化現象を可能にする社会と個人の関係の論理であるといつてよい。そういうわけで、排除個人性と関わっている近代社会における個人化現象についてのアルミン・ナセヒの指摘に注目してみよう。

ナセヒによれば、近代における個人化現象には四つの特性がある (Nassehi 2002 : 124)。第一には、個人化は、個人自身が自らの生活の創造者であり、自律的な行為の担い手であるということを表現している。第二には、個人化は、近代社会において個人の決定がますます重要になっているということを意味している。第三に個人化は、生活の多様性、個人の選択

しうる生活の仕方の複数性を含意している。第四にいま述べた3つの特質を持つ個人化は、近代西洋において明確になっており、その意味で近代西洋的個人化だといってよい。このように4つの特性を有する個人化現象は、もとより社会から個人が離反することを意味したものではない。言い換えれば、個人化は自律性の高い個人の生活を含意するといっても、そうした個人の自律性や個人の決定を特徴とする個人の生活はそれを可能にする社会的な条件があったから可能であったということをけっして無視してはならない。角度を変えていえば、孤独な個人の生活や社会から隔絶された個人の生活という出来事が、決して個人化現象の特質ではない。つまり、個人化現象は、社会から個人が離反した結果ではなく、社会の側で個人の自律性や個人による決定を要請した結果であるといつてよい。このように、個人化現象が孤独とか、離反とか、あるいは反社会性とかを意味するのではないことをしっかりと確認しておきたい。

このようにしてみると、個人化の進展が社会的要因と無関係であるどころか、ある種の社会的要因が個人化の進展を促しているともみてよい。言い換えれば、個人化にふさわしい社会的要因がみられるからこそ、そうした個人化の進展が現実化したとみることが妥当であろう。このことはすでにエミール・デュルケムが明確にしたことであった。そうしてみると、個人化がますます進むことは、むしろ社会への個人の依存がますます進むことと十分に両立している。個人化にとって好都合な社会的要因があるからこそ、個人化が現実化しており、またそのようにして実現された個人化が、社会構造をより個人化に好都合に変化させる要因となっている。機能分化した社会に転換したことが、日常生活における個人化の進展を要請したといつてよい。社会学は、この個人化の進展と機能分化した社会の出現との適恰的な関係についての学問的考察として出発していると考えられる。その意味で、まさにナセヒがいつておるとおり、「個人性の精神からの社会学の誕生」といつてよからう (Nassehi 2003: 95)。そうはいうものの、この社会学の主たるテーマとしての、個人化と機能分化した社会の出現との関係を明確に視野に収めるためには、20世紀末葉のニクラス・ルーマンの社会システム理論を待たなければならなかった。

ルーマンは、現代における個人と社会の関係に迫るために、社会システムと心理システムの関係を示明化することを企てた。ルーマンは、心理システムと社会システムの構造的カップリングに止目するのみならず、心理システムに対する社会システムの創発性を視野に入れて、近代ないし現代における社会と個人の関係の分析枠組みを整備した。そうしたルーマンからすると、これまでの社会学における行為理論は、社会と個人の関係の論理に迫りえなかった点で重大な問題を孕んでいる。そうした社会学的行為理論の限界は、超越論的現象学の問題点とある意味では連動している。というのも、社会学的行為理論における個人概念や主観性概念は、結局のところ超越論的現象学の限界内にあり、主体概念の脱構築にある意味で

は挫折したといわざるをえないからである。この主体の、中途半端な脱構築を徹底的に排して、主体概念の脱構築に成功したのが、ルーマン理論であったとあってよからう。とくにルーマンは、超越論的現象学が、個人の自己準拠に目を向けた点は評価できるとしても、個人の自己準拠の具体的なあり方をみることができないことから、超越論的主体概念を設定したことに批判の目を向ける。ここではつまびらかにしえないが、ルーマンは超越論的な間主観性を否定したところに自らのコミュニケーション論を位置づけている(村中 2001)。ルーマンは、意識の不透明性が、社会的なものの創発の前提条件であることを誰よりも明確にしている。社会的なものは意識と意識の相互不透明性によって阻止されるのではなく、意識と意識が相互に不透明なところから社会的なものが創発するというロジックをルーマンは明らかにした。

主体の脱構築に成功したルーマンは、排除個人性という概念を掲げ、その上で近代における社会と個人の間を考察することによって、近代的個人と近代社会の近代的関係の論理を精緻化していった。その帰結が、要求個人主義であることは繰り返す述べてところである。もとより、そうした要求個人性ないし要求個人主義を可能にしたのは社会的条件の変化であった。そのさいたるものが成層化された社会から機能分化した社会への変化なのである。

ルーマンによれば、成層化された社会においてはある家族に誕生したことが、その人の人生行路をほぼ決定しているという意味で、社会による個人の包摂が行われた。いってみれば、そのような社会では個人は、社会によって包摂されなければ、社会から放逐される運命にあった。観点を変えていえば、成層化された社会においては、社会と個人の間は、全体／部分の関係にあり、個人は社会の一部と目された。ルーマンは、こうした社会と個人の間を包摂個人性として特徴づけている。ところが、機能分化を遂げた近代社会になると、社会と個人の間は、その様相を一変させる。すなわち、ある家族に生まれたことが、その人の人生行路をかなりの程度左右するとはいっても、全面的に決定することはなくなっている。ある家族に生まれたことが、その社会におけるその人間の具体的な位置を全面的に決定することは、機能分化社会においてはほぼ消滅した。言い換えれば、家族という出自が人生を全面的に方向づける包摂個人性は、終焉をとげざるをえなくなった。ルーマンの排除個人性は、まさにこの包摂個人性の終焉をその前提としている。つまり、家族の出自の如何ではなく、その後の人生行路はとくに教育キャリアと職業キャリアによって方向づけられることになる。

機能分化した社会に移行すると、個人は、もはやひとつの、あるいはたったひとつの社会の部分システムとのみ関わることができない。個人は複数の機能システムに関わることになる。そこで、個人としては、様々な機能システムにおける多種多様な期待を処理する必要があることになる。いってみれば、多種多様な機能システムに参加することから、多種多様な複数の期待を整合化し、調整する必要が出てくる。こうした複数の期待をどのように整合

するのかが、いわば排除個人性の原点である。繰り返していえば、機能分化社会では、個人は複数の機能システムに参加して生活を送ることになる。ところが、そうした機能分化した社会では、そうした複数の機能システムの関係の総体というものは、もはやない。したがって、個人は、比喩的にはなるが、社会のなかに位置するわけにはいかなくなる。しかし、このことは、個人が社会の直接の命令のもとに生活するわけではないということだけを意味するのであって、決して社会と無関係に個人が存在することを意味しない。繰り返していえば、個人はもはや社会のなかに具体的な位置づけを持たない。個人は、機能分化した社会へ丸ごとの人間として包摂されることはもはやない。社会の特定の箇所具体的に位置づけられないということは、決して社会と無関係であるということの意味するのではないことに注意しよう。機能分化を遂げた社会では、個人はその機能分化を遂げた社会での多種多様な機能システムとどう関係するのかという問題を突きつけられていることになる。この問題群をルーマンは、排除個人性と呼ぶのだが、それがあくまでも社会と個人の関係のことを指していることを銘記する必要がある。社会から個人が締め出されているというのではなく、あるいは社会によって個人が全面的に決定されないということが排除個人性のもっとも重要な特質なのである。もう少しいえば、個人は社会の構造のなかに具体的に社会によって位置づけられていない状況で、個人はむしろ個人としての自律性や個人としての自由がなければ生活を遂行できないという事態が出来している。そういう意味で、排除個人性の「排除」は個人の自由にとっての不可欠の社会的要因であるとさえ言ってよかろう。社会の構造の内部に具体的に社会によって一方的に位置づけられなくなった個人は、社会からのそうした一方的な指令がなくなったので、むしろ自分自身の創意工夫で、独自の判断によって社会に参加することが求められるといえるだろう。したがって、排除個人性は、決して個人を社会から締め出すのではなく、社会によって社会のしかるべき箇所に個人が位置づけられなくなったという事態を活用して、個人が自らの才覚で自由に社会に参加することが可能になったということ表現している。

3. 要求個人性の論理

近代において、個人は初めて個人としての条件を整えたといつてよい。この近代的個人は、近代が産出した最大の社会的成果のひとつであろう。この近代的個人を産み出した社会は、成層化された社会から機能分化した社会へと構造変動を遂げており、さらにそうした近代的個人にいつそうふさわしい社会構造に変貌を遂げつつあるのが、近代社会の方向性といつてよいだろう。近代的個人を形成した近代社会は、その近代的個人にいつそう適合的な社会へ向かうことになる。そうした近代社会は、ルーマンの表現によれば構造の脱中心化が行われ、

中心もなければ周辺もなく、頂点もなければ底辺もない社会ということになる。さらに機能システムと機能システムは、それぞれの依存性を強めながら、それぞれの自律性をいっそう高めることを可能にしている。そうしたダイナミックな近代社会は、さらにいっそう近代的な個人を要求することになる。そうした近代的個人の論理としてルーマンが用意したのが要求個人性であり、要求個人性のゼマンティックとしての要求個人主義なのである。ルーマンが、排除個人性といういわば近代的個人の登場する構造的枠組みだけを論じ、そこで存立する近代的個人それ自体のあり方について積極的な提言をしてなかったとするナセヒのルーマン批判 (Nassehi 2002: 128-129) にはにわかには与しがたい。もっとも、ルーマンが近代的個人の論理としての要求個人主義について、あまりにも一般的な定義にとどまり、例えば近代における労働者や農民の具体的な個人像、あるいはそこで可能な個人性について、つぶさに明らかにしなかったことは否めない。しかしながら、そうした例えば農民個人の個人性、あるいはそのキャリアに、あるいはライフコースに立ち向かうための必須の理論的資源として要求個人主義が位置しているとみることは十分に可能なのである。ある意味では、近代における個人の具体的なあり方に迫る理論的用意として要求個人性と要求個人主義が位置づけられるといえるだろう。そうであるにもかかわらず、ルーマン研究の進展が顕著にみられる2000年以降になっても、数多くのルーマン研究の中で要求個人性や要求個人主義に言及した論文はきわめて少なく、皆無に近いのは奇異であるといわざるをえない。いずれにしても、排除個人性の積極的な論理的形態として、要求個人性がルーマンによって提起されていることをわれわれは知らないわけにはいかない。端的に言えば、ルーマンの要求個人性の論理こそ、ルーマンの提起した排除個人性の論理的帰結といってよかろう。かかるものとしての要求個人性は、近代ないし現代における個人と社会の関係性の論理化といってよかろう。いうまでもなくルーマンにとって、近代的個人も、近代社会の環境に位置しており、決して個人は社会の部分ではない。社会を不可欠の環境とする人間としての近代的個人は、その環境である社会と非対称的な関係を構築している。近代的個人は、近代社会という社会環境との非対称的な関係をいっそう確かにすることが要請されている。端的に言えば、社会との関わり合いをいっそう確かなものにし、その上で社会としっかりと構造的カップリングを遂げる必要がある、そのことを滞りなく行うために要求個人性が主題化されることになる。個人がその個人としての意味合いをいっそう明確なかたちにするという要求、本当の意味でますます個人的な個人になりたいという要求が、その個人にとって最大にして最高の要求であるということルーマンの要求個人性は含意している。この要求個人性からすると、そのときそこに現存する個人の個人性は、その個人の現実可能性の全貌ではなく、むしろそうありたいと願う新たなる個人のあり方という「要求として掲げる個人」と「現実の個人」との関係が個人が視野に収め、その差異をいかにして縮小するか近代個人は全力をあげている。そん

なわけで、個人が願望する個人のあり方と現実の個人のあり方との緊張関係こそルーマンの要求個人性の根幹なのである。そのうえでルーマンは、そうした両者の緊張関係を解消する方向に個人の新しいあり方の可能性を見定めている。

いずれにせよ、環境に対する非対称的關係が個人によって処理される形式が、要求の実現／非実現の形式なのである。個人のそうした要求は、結局のところ、現にある個人とその個人が願望する自らにとっての新たな個人との差異をふまえて、現にある個人が現にあるのとは異なる個人になることを要求する。このように個人が、現にある個人とは異なる個人になりたいという要求は、現実に見出されるそのシステム／環境-差異を第二の差異によって拡充し、補強していることを含意しているといつてよい。詳しくいえば、この新たな個人になりたいという要求は、現実にもみられる個人ということやそこで実践していることがらを、個人が望んでいることがらと比較考慮しているわけであり、そういった意味では現にもみられる個人と環境の差異を新たな第二の差異によって補強しているといえるだろう。ルーマンによれば、こうした個人は、この意味での第一の差異を第二の差異によって操作することで、新たなシステム／環境-差異をいっそう明確に構築することになる。

いうまでもなく、こうした個人に対する要求は、決して近代社会になって突然に出現したものではない。しかしながら、このような第二の差異を基軸として第一の差異を補強しようとするような、新たな個人をめざす要求は、近代社会になって初めて大量に出現していることも否めないであろう。こうした要求個人性は、ある意味では快／不快の図式や利害関心の図式をこえたところで近代人のあり方に影響を与えているといつても過言ではない。ある意味では要求個人性にしがって生きるというオリエンテーションは、いわば普遍的な個人主義への道を歩むことになるといつてよかろう。「精確にいえば、要求という形式を駆使すると、その人が現にそうであるのは、その人の全貌ではないということが明確にされる」(Luhmann 1989: 243)。結局のところ、こうした個人性の論理の核心となっているのは、個人性への要求以外のいかなる要求をも、要求個人性の要求に含まれるということなのである (Luhmann 1989: 243)。この要求個人性という原理は、近代における個人の個人性という原理をいわば貫徹する。というのも、この要求個人性という原理は、新たな個人になりたいという、自分自身に対する要求が、他のあらゆる要求よりも、優先されるからである (Luhmann 1989: 243)。そうすると、個人にとって見出されるであろうアイデンティティは、あらゆることがらがそこに立ち戻る出発点や地点ではなく、個人であるという要求、しかもそうした個人として認められたいという要求との関連を持たざるをえない (Luhmann 1989: 243)。そんなわけで要求個人性の論理は、人々がそれぞれの世界をそれを用いてテストし、またそのさい同時に、自分自身のあり方を規定できる原理であつて、そうであるからには個人の諸欲求を生み出す原理であり、その諸欲求を充足するものが世界のどこにあるのかの情報を探索する原

理である(Luhmann 1989:243)。こうした要求個人性は、個人が現にそうである個人であるというトートロジーを打破して、現にある個人は現にそうでない個人であるというパラドックスに行き着く。そうしたパラドックスに耐えて、そのパラドックスをどう打破するかという問題に個人は向き合うことになる。そうなると個人のすべての要求は、この要求個人性の原理のもとにおかれることになり、個人と社会の差異に対する個人の要求も、この要求個人主義の原則のもとに点検されることになる。

いうまでもなく、こうした要求個人性や要求個人主義は、けっして社会的なものと対立するのではなく、繰り返し述べたとおり、機能分化を遂げた近代社会の産物である。そればかりではない。機能分化を遂げた近代社会は、むしろ積極的にそうした要求個人性を育てている。近代社会における諸機能システムは、その機能システムの運行に必要な近代的個人をますます必要とする。そんなわけで、要求個人性や要求個人主義を個人の生活オリエンテーションとしたのは、機能分化した社会であり、機能分化を遂げた社会がいわば要求個人主義を必要としているとみてよい。

4. 結びにかえて

要求個人主義を育んだ近代社会と要求個人主義の関係が、問題となってくる。このことについては経験的研究を待たざるをえないのだが、その前になんといっても、機能システムへの個人の包摂、あるいはひらたくいえば、機能システムと個人の関係が改めて問われてくる。この点についてルーマンは、つまびらかにすることなく、1998年に他界した。このルーマンにかわって、機能分化を遂げた社会と個人の関係についてつぶさに考察したのが、ほかならぬアルミン・ナセヒである。ナセヒによると、ルーマンは、排除個人性の論理を提示したものの、機能分化を遂げた近代における社会と個人の間を捉えるための前提であることを明らかにしたにとどまり、近代における社会と個人の間を考察するための理論を十全に用意したとはとうてい言い難い。そのさいたるものが、排除個人性として特徴づけられる近代的個人のあり方が、じつは当のそれぞれの機能システムによって生まれたという点に対する考察である。ナセヒは、排除個人性が機能システムから個人を外在化するのではないことを明確にすると同時に、それぞれの機能システムは、それぞれの機能システムに適合的な個人を要請しているとみている。このように、機能システムから「個人の生活形式を外在化する過程が個人化ではない」ことを強調するナセヒは、それぞれの機能システムが、コミュニケーション関係における個人化された形式を作り出していることに注目している(Nassehi 2002:129-130)。つまり、それぞれの機能システムは、それぞれ個人化過程を促進する要因を孕んでいる。端的にいえば、あの個人化現象として特性描写された4つの特性、すなわち、自律

性、個人の決定、生活の複合性、近代西洋的個人性として特徴づけられた個人化は、ことごとく主要な機能システムにおける個人に対する期待、ルーマンの用語でいえばパーソンに対する期待なのである。例えば、経済システムにおいては、投資家には投資をする自由、消費者には購買する自由が要求される。そうした経済システムは、投資家や消費者といった決定者に依存している。同様に法システムにおいては責任主体としての個人という概念が明確になるし、その意味で個人の決定が重要視されるようになる。つまり、法システムでは個人の自主性を前提とした個人の責任がクローズアップされる。また、政治システムにおいては投票における個人の自由が要求される。さらに教育システムにおいては個人による自由な学校選択が可能でなければならない。ナセヒはさらに現代福祉国家においても、個人の自由や個人の責任の問題がいよいよ注目されるとみている。そうしてみると、ナセヒからすれば、ルーマンの述べた排除個人性は、いわば個人化の前提条件の把握にとどまっていたのである。排除個人性という個人化の社会的前提条件のうえで、いかなるかたちで個人の個人化が進展しているのかに目を向ける必要があることをナセヒは主張する。このナセヒの結論に私はほぼ賛成したい。ただし、「ほぼ」といったのは、そうしたナセヒの結論が、ルーマンの排除個人性を否定するものではないからである。ルーマンの排除個人性は、ナセヒにとっても個人が個人化するための社会的条件、さらにいえば「エコロジー的条件」であった(Nassehi 2002: 132)。こうした条件をふまえて、いかにして個人の個人性の論理が展開されるのかについての考察を機能システムと個人の関係についての把握からさらに進んで、組織と個人の関係の把握へといたるべきであろう。

注

- 1) このことは、ルーマンの『社会システム理論』の序章や『社会の社会』の第一章の冒頭において強調されている。
- 2) この点に注目した論考としては、ナセヒ(2002)が興味深い。
- 3) ルーマン自身は、ライフコースについて多少の論考を残しているものの、特定の時代の特定の地域の人々のライフコースやバイオグラフィについて言及したことはない。しかしながら、ライフコースについてのルーマンの論考がバイオグラフィに関するナセヒの考察を生みだしていることは注目に値する。
- 4) ナセヒが共著者となっている著作がたいへんに興味深い(Weber et al. 2003)。バイオグラフィ分析は、今後のルーマン理論の展開のひとつとなるに違いない。
- 5) 排除が「いまだ包摂されざる事態」であるということは、淑徳大学社会学部・淑徳大学大学院社会学研究科調査助手松本真一君との討議によって明確にされた。

文献

- Fuchs, P., 2000, "Individualisierung im System", in:Kron, T.(Hg.), *Individualisierung und soziologische Theorie*, Opladen:Leske+Budrich, S.69-87.
- Lehmann, M., 2002, *Inklusion:Beobachtungen einer sozialen Form am Beispiel von Religion und Kirche*, Humanities Online.

- Luhmann, N., 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp=1993 (上) 1995 (下) 佐藤勉監訳『社会システム理論』恒星社厚生閣
- Luhmann, N., 1989, “Individuum, Individualität, Individualismus”, in: Luhmann, N., *Gesellschaftsstruktur und Semantik* Bd3, Suhrkamp, S.149-258.
- Luhmann, N., 1995a, “Die Form ‘Person’”, in: Luhmann, N., *Soziologische Aufklärung 6: Die Soziologie und der Mensch*, Westdeutscher Verlag, S.142-154.
- Luhmann, N., 1995b, “Inklusion und Exklusion”, in: Luhmann, N., *Soziologische Aufklärung 6: Die Soziologie und der Mensch*, Westdeutscher Verlag, S.237-264.
- Luhmann, N., 1995c, “Die Soziologie und der Mensch”, in: Luhmann, N., *Soziologische Aufklärung 6: Die Soziologie und der Mensch*, Westdeutscher Verlag, S.265-274.
- Luhmann, N., 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft* 2Bd, Suhrkamp.
- 村中知子 2001 「間主観性とコミュニケーション ルーマンと現象学」『茨城大学政経学会雑誌』71号, 茨城大学政経学会, 73-85.
- Nassehi, A., 1999, “Inklusion, Exklusion-Integration, Desintegration. Die Theorie funktionaler Differenzierung und die Desintegrationsthese” in: Nassehi, A., *Differenzierungsfolgen. Beiträge zur Soziologie der Moderne*, Westdeutscher Verlag, S.105-132.
- Nassehi, A., 2002, “Exclusion Individuality or Individualisation by Inclusion?” in: *Soziale Systeme* 7, S.124-135.
- Nassehi, A., 2003, *Geschlossenheit und Offenheit. Studien zur Theorie der modernen Gesellschaft*, Suhrkamp.
- 佐藤勉 2003 「ルーマン理論における人間の問題」『淑徳大学社会学部研究紀要』第37号, 97-121.
- Stichweh, R., 1997, “Inklusion/Exklusion, funktionale Differenzierung und die Theorie der Weltgesellschaft”, in: *Soziale Systeme* 3, S.123-136.
- Stichweh, R., 2000, *Die Weltgesellschaft Soziologische Analysen*, Suhrkamp.
- Weber, G., Nassehi, A., Weber-Schlenther, R., Sill, O., Kneer, G., Nollmann, G., Saake, I., 2003, *Emigration der Siebenbürger Sachsen. Studien zu Ost-West-Wanderungen im 20. Jahrhundert*, Westdeutscher Verlag.

The Problem of Exclusion Individualism in the Theory of N.Luhmann

Tsutomu SATO

Exclusion individuality is one of the most basic concepts of Luhmann's theory about the relationship between modern society and individuals. The concept signifies the most important element in the relationship between society and individuals in the modern world, i.e., in modern society, unlike in a hierarchical society, the life course of an individual is not determined by his/ her birth or family background. This exclusion individuality was produced by modern society, and has been transformed into need individuality. This need individuality in turn determines the course of modern society which originally produced the exclusion individuality. In other words, Luhmann reveals, in the exclusion individuality, the relationship between modern society and individuals, and thinks that the exclusion individuality is transformed into the need individualism which determines the course of the functional systems and the types of organisation of modern society. This paper deals with Luhmann's analysis of the exclusion individuality, centring on Armin Nassehi's recent chapter, "Exclusion Individuality or Individualization by Inclusion?". This paper argues against Nassehi who understands Luhmann's concept of the exclusion individuality as biased toward the ideal type of the western individual, by elucidating the logical structure of the need individualism.